日和で〇〇デレを書いてみた

せれーな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日和で〇〇デレを書いてみた

【Ｎコード】
Ｎ０９１２Ｓ

【作者名】
せれーな

【あらすじ】
この小説は、うｐ主がメイン日和キャラ６人で色んなデレを書いてみた自己満足小説です（´∀｀）
ツンデレからヤンデレまで…
貴方はどんなデレがお好みかな？

妹子のターン（前書き）

はい！今回は、皆のアイドル、
妹子さんにデレて頂きました！！
気になる〇〇デレは、
王道

『ツンデレ』

になりました！

色々と残念な感じになりましたがそれでもバッチ恋！な方は、
どうぞ！！

妹子のターン

いつも通りのある日の事。
君は突然、立ち上がり言った…

「クローバーを探しに行こう！！」「どっかのアニメのＥＤに合わせて言わないで下さい。」

アホなやり取りはさておき、
本当にいつも通りの馬鹿でアホでうんこな太子の提案を、僕は真顔で受け流した。

「ねえ～行こうよ～お願い。一生のお願い。」
「『一生のお願い』って、いつか聞いたことありますよ。」
「わ、私は摂政だから何回使っても許されるんじゃい！！！」
「職権乱用じゃないですか。」
「ええい！！！良いから来るでおま！！！」
「うっちょっと、僕まだ仕事がっ」
無理矢理太子に腕を掴まれ、連行される。
貧弱男のくせにこんな時だけ力が強いのがムカつく。
だいたい、こんな人を摂政に選んだ奴は誰だ。一発殴ってやりたい。
そんな思いも届くはずなく、僕はクローバーの咲く自分の家へと強制送還されるのであった。

「クローバーを集めるったって、何も僕の家じゃなくてもいいじゃないですか。」
「だって～帰りにカレーも食べていけるだろ？一石二鳥だ♪」
自分の庭にクローバーを植えた事を激しく後悔する。
「さあ、今日はいくつ見付けられるかな～。」
「せいぜい頑張って下さい。まあ、どうせ一本も見付けられないでしょうけど？」
「おま！毒妹子っ！！この私が一本も見付けられるないなんてありえんぞ！！よーし、見てろよ！！世界中の幸運かっさらう位見付けてやるからな！！！」

１０分後。

「あっれぇ～どうしたんですか？まさか、まだ一本も見付かってないんですか～？」
「そっそんなこと…ちょっと、きゅ、休憩してただけだぞっ？！」

３０分後。

「きょ、今日は何だか四つ葉の神様がお休みみたいだな～あはははは。

」
「そんな神様いたら会ってみたいよ。」

1時間後。

「わあああああ！！！！何でないんだよおおおおお！！！！」
とうとう太子はふさぎ込んでしまった。

「ほら、言ったでしょう？さあ、もうこれ位にして、カレー食べましょうよ。」
「嫌だ嫌だ！！これじゃあ妹子が勝ったことになってしまう！！」

（ちょっといじめ過ぎたかな。）

「また今度見付ければいいじゃないですか。」
「駄目なんだ！！私は見付けるまでここを動かんぞ！！」
「～～～～ええーいッ！！！
さっさと来んかい、このしじみがあああぁぁぁぁああ！！！」
「二枚貝ッッ！！！」

太子に蹴りを食らわせてなんとか家に引きずり込んだものの、一向

にすねている太子にどうしたものかと困る僕。

「ほら、せっかくカレー作ったんですから食べて下さいよ。」

「…うう、四つ葉。」

未だに四つ葉四つ葉と繰り返している太子にだんだんイライラしてくる。

「ったく！！！いいじゃないですか、四つ葉なんて何時でも探せるでしょ！！」

「っだって！！せっかく、妹子が一緒に来てくれたのに…。」

「……太子。」

予想外の言葉にどう返していいのかわからなくなる。

太子は本当に落ち込んでいるようだった。

「……僕は何とも思ってませんよ？だから、今は笑って…カレー食べましょうよ。」

「い、妹子。」

「ほら、笑って。」

「お、おう！！　よっしゃあああ食うぞおおおお！！！」

いつもの調子に戻った太子に安心する。

太子が自分の事を思ってくれていた事に何だか照れくさい気持ちになる。

取り合えず、今はカレーを頬張る事で紛らわしてみよう。

太子の背中を見送り、今日の四つ葉探しもお開きとなった。
誰も居なくなった居間に一人佇みながら、僕は何とも言えない気持ちにされされていた。

『せっかく妹子が一緒に来てくれたのに。』

さっきの太子の言葉が頭の中でこだまする。
思い出すだけで、赤面してしまう。
このままこうしているのももどかしくなった僕は、庭へと飛び出した。
さっきまで太子が一生懸命探していたクローバー畑に、屈み込む。
（ったく、僕は本当に何やってんだッ……）

翌日。

「いーもーこー♪」
「ッ！！」

いつものようにやって来た太子になんだか緊張してしまう。

（何ビビってんだ！早く渡せ、僕！！）

「あ、あの、太子…」
「ん？なんだよ？」
「あの…これ…」

恐る恐る僕は、四つ葉のクローバーを差し出す。
すると、太子は目を輝かせてそれを受け取った。

「妹子！！！こ、これっ私の為に見付けてくれたのか？！」

『私の為に』という単語に、顔から火が出そうになる。

「ちっ違いますよ？！！べ、別にあんたの為に探した訳じゃなくてッ…そ、そう！！偶然見付けてですねッ…」

あたふたと手をわきわきさせる僕。

「でも、妹子…その手。」
「えッ」

僕の手を指差され、直ぐさま手を隠す。
昨日、夜になるまで探し続けてやっと見付けた頃には、手が傷だらけになっていた。

「こっこれは、えっとッそのッ／／／／」
「ははは。妹子は可愛いなあ～。」「だから違いますって！！！／／／／」

どったんばったんと騒ぐ中、太子が喜んでくれたことに「ああ、探して良かったな」なんて思ってしまう僕であった。

妹子のターン（後書き）

なんちゃってブー☆

よくありそうなネタですねｗｗ
何気にツンデレネタが1番悩みました（＾ｑ＾）
これからも、色んなデレを書いていきますので…
是非お付き合い下さい！！

べ、別に読んでくれたからって、嬉しいなんて思ってないんだから
ッ勘違いしないでよねッ／／／／

（ツンデレ風にしめてみました。　　え？ウザいって？
）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0912s/

日和で○○デレを書いてみた

2011年10月7日18時08分発行